

西域奇譚①——不死の座

「ほう、侍従長殿のご使者だと？ 霸王の容態もいよいよ切羽詰まったか。ならば、帰っておいぼれ殿によく伝えるがよい。そなたの願いは聞き届けよう。だが、不死の座はすでに成っておるとな」

*

霸王は久しく病の床に伏せていた。

四百年余り続くダウラ王国を最大版図にまで広げ、その威勢並ぶ者なしとうたわれた霸王も、老いと病には勝てなかった。めつきり気力の衰えた王に見切りをつけた臣下の間では、このところ血で血を洗う権力抗

争が繰り広げられていた。

嫡男を推す宰相、腹違いの弟君を擁立する軍大臣。王国を二分する争いを憂える老侍従長がある人物の消息を聞いたのはこのころだった。

アブー＝マリク。王国一の匠と称された人である。

マリク一族は代々、工芸の技をもつて王家に仕えていた。鏡、書台、墨池、香炉、贅を凝らした工芸品を珍重した歴代王は、一族の当主を貴族として遇していた。

とりわけ一族のお家芸と呼ばれたのは椅子づくりであった。険峽に生育する仙木をくりぬいてつくるといふ彼らの椅子は、年にひとつかふたつしか生産されない。長寿を約束するといふこの椅子をなんとしても入手しようとして、王侯貴族や大金持は競って貢物を贈った。ためにマリク家の倉には一時、王国中の金銀財宝が集まったほどだという。

あまたの名人、上手を生んで来た名門マーリック家。その長い歴史の中でもひとときわ抜きんでた天才がアブーだった。

幼少よりその天稟をうたわれたアブーが数え年十三に達したとき、その父はマーリック家のおきてにしたがってひとつの課題を課した。墨箱の内側に三博士と四頭の駱駝を配せ。この課題にんえて息子が彫琢した細密画は、父の期待を遥かに上回るものだった。

細工が完成した夜、検分しようとした父の手を一条の光が刺し貫いた。驚いて手を引くと、息子はこれで細工がなりましたと涼やかに笑った。父が蓋を開くと、すさまじいばかりの光芒が目を射る。三博士の行く手を導く客星の光だった。

「マーリック家は神の子を授かった」

欣喜した父親は王国中に触れ回ったという。

成人したアブーは父親の期待に違わぬ進境を示し、遂にはその名声古今に並ぶ者なし称えられるまでになった。

ある時、この名匠が王宮に召されたことがあった。参上したアブーに老霸王は次のような難題を切り出した。

「そちの一族は代々工芸の技をもってわが王家に仕えてきた。とりわけ秀でた技量を示したのは椅子づくりじゃ」

霸王はみずからの王座を震える指で指し示した。

「そちも聞いておろうが、この王座をつくったのはそちの曾祖父アル・マールクじゃ。アツ・ターク山の仙木をくり抜いたというこの椅子の仙力により、わが祖父も、わが父も王国一の長寿を全うすることができた。余もまた八十の齢を超える今日まで、病ひとつわづらったことがない。じゃが……」

霸王は弱々しく首を振った。

「この長寿の椅子といえども、時の流れをすべて堰止めることはできぬ。この頃では、余の眼も、耳も、かつてのように機敏に働いてはくれぬ。この有様では次の冬を越すことさえかなうかどうか。もとより余は死など恐れるものではない。したが、何としても気がかりなのは長子ナシルのことじゃ。ナシルの即位をこの眼で見届けるまでは、余は死んでも死に切れぬ」

枯れ木のような王のからだは王座の上で震えた。

「そこでそなたにぜひとも頼みたいことがある。ほかでもない、余のために新たな王座をつくってはくれまいか。いや、不老不死とまでは言わぬ。せめてあと三年長らえられるほどの……」

アブーは平伏したまましばらく考えている様子だったが、やがて顔を

あげるとこう答えた。

「二十一日間のご猶予をお与え下さい。お申しつけのとおり不老不死の座を仕上げてご覧にいきます」

王国一の名工が老霸王のために不老不死の王座をつくっている。その噂はたちまち王国中を駆けめぐった。伐り出された仙木がマールク家の工房に運び込まれた時には、家の周りを群集が十重二十重に取り囲んだほどだという。

入念な下準備を終えたアブーはいよいよ王座の製作にとりかかった。

彼はまず弟子に命じて、王座が据えられるべき場所に厚い天幕を張り巡らせた。それから、何びとも——たとえ王その人といえども——一歩も近づいてはならぬと言ひ残して、その奥に引きこもった。

一日、二日、三日たち、一週間がすぎた。この間、アブーは天幕から

一步も出ず、一心不乱に製作に励んでいる様子だったが、不思議なこと
に中からは鑿の音も槌の音も漏れてこなかった。いぶかった王宮人は、
アブーは見えない鑿と槌を振っているに違いないと噂しあったものであ
る。

やがて約束の期日があった。この日、老王は自ら天幕近くまで足を運び、
腹心の侍従長とともにアブーを待った。

「おおつ、待ちかねたぞ」

昼ごろ、天幕の陰からあらわれたアブーに王が弾んだ声をかけた。二
十一日間に及ぶ労苦のせいで頬が削げた名工はさすがに疲れきった様子
だったが、眼光だけはなお爛々たる光をたたえていた。

「して、首尾は」

「ようやく成りました」

答えるなりアブーは手にした紐をさっと引いた。天幕が一気に落ちる。するとそこには――。

なにもなかった。名工一世一代の作が据えられるべき台座には、一塵の埃がむなしく舞うばかり。

初めこそ、何かの趣向かと疑った老王だったが、やがて真相を知るとわなわなと体を震わせはじめた。

「たばかったな、アブー！」

満面に朱を注いで叫ぶと、警護の兵に命じてアブーを捕らえさせた。

「この慮外者が二度と鑿を持ってぬよう、その両腕を切り落としてしまえ」
アブーと親交厚い侍従長が、そればかりはと許しを願ったが、王の怒りは収まらなかった。腰縄を打たれ、王宮の床を引きずられていきながら、アブーは大声で叫んだ。

「老王よ！ 哀れな老王よ！ 眼も耳も知恵も衰えた王には、この不死の座が見えぬのか。王国の永遠を約束するこの王座が。わが腕を切り落とすというならそれもよい。だが、老王よ。そなたは羊の知恵と引き換えに、永遠に終わりのない責め苦を受けるのだぞ……」

この日からマリーク一族は工芸の技をすべて止められた。両腕を失ったアブーは出奔し、そのまま消息を断った。

空の王座を忌み嫌った老王は台座の取壊しと、宮殿の建て替えを命じたが、そのたびに時ならぬ大風や雷鳴が王宮を襲った。立ち会った大工たちは、アブーの怨みが呼んだ嵐にちがいないと恐れ、果たさぬまま、やがて宮殿ごと封印されることになった。

アブーの一件があつて以来、老王の衰えはますますひどく、半年ならずして病に伏せるようになった。これに呼応するように、長子派と弟王

派の世継ぎ争いもますます熾烈の度を加えていった。

このころ、憂国の侍従長のもとに、出奔したアブーの消息がもたらされた。両腕を切断された名工はその後異国の山間に住まい、そこで昔と変わらぬ工芸の腕を揮っているという。

あれほどの名人上手になればもはや肉体は必要なくなるのか。侍従長は感に堪えながら、密かにアブーに使者を立てて王座の完成を願った。

しばらくして使者からもたらされた返事は思いがけないものだった。

「王座はすでに成っている……」

まさかとは思いながら、侍従長は警護の兵に固く口止めし、深夜、引き立てられるように宮殿の封印を破った。

期待に反して、燭台の灯に浮かびあがったのは以前と変わらぬ空の台座だった。

落胆して引き返そうとした侍従長は、ふと気配のようなものを感じて足を止めた。燭台を高く掲げ、再び台座の上に目を凝らしたが、やがて、「気のせいじゃったか」

と、力なくつぶやいて宮殿をあとにした。

そんなことがあってから数週間後、長かった権力抗争にも遂に終止符が打たれるときが来た。弟君が病王の代理として王家の菩提寺に参内するその日、長子派の貫主の手引きによりこれを討つことに決したのである。そして間を置かず長子の即位式を行う手はずが整えられた。

決行を翌朝に控えた一夜、今は打ち捨てられた宮殿に近づくひとつの影があった。影は扉の封印を解くと、体ごとそれを押し開けた。いや、今度は侍従長ではない。命の灯が尽きるのを悟った宮殿の主、すなわち老霸王その人であった。

おぼつかめ足取りで宮殿内に踏み入れた老王は、階段の下から台座を見上げた。

「なんと……」

王の口がかすかに動く。

「許せ、アブーよ」

振り絞るように言うと、そのままよろけて前に手をついた。しばしその姿勢で動かなかったが、やがて一段、また一段と階段を這いのぼり始めた。その眼には今やアブーの傑作がまざまざと見えていたのである。

最後の階段をよじのぼり、かろうじて王座に身をあげた王は、たちまち体内に力が充溢するのを感じた。力は新しい生命の炎となって身内を貫いた。

「われ、不老不死の生命をえたり！」

老王は歡喜の声をあげた。

次の日、首尾の報せを待ちかねていた侍従長のもとに、侍従のひとりからもたらされたのは予期せぬ報告だった。

今朝になって王様の姿が寢所から消えた。侍女たちが王宮中をさがしまわったが、どこにも見あたらない、と。相前後して現われた警護の武官が、何者かの手で新宮殿の封印が破られていると告げた。

「このこといっさい他言無用じゃ」

ふたりの部下に命じると、侍従長は転げるように執務室を出ていった。新宮殿に足を踏み入れた侍従長は、驚くべきものを見出し、声にならぬ声を発しながら王座の下に駆けよった。つい先日までは空だったはずの台座に出現したものの、それはまさしく在りし日の霸王の姿を象った王座ではないか。

背もたれの上にはいくさ神と恐れられた稀有の異相、その下の首に続いて背もたれをなす厚い胸板、肘掛けに真つ直ぐ突き出された太い両腕、その堂々たるたたずまいは、まさしく霸王の意志がそこに座つてあるようだった。

「ああ、なんたる、うかつ………」

台座の前に跪いた老侍従長は天を仰いで慨嘆した。

その時、王宮の彼方でにわかには喚声があがったような気がした。ついで、廊下をばたばた走る足音が近づいてくる。

「侍従長様！」

叫びながら飛び込んできたのは、血だるまの警護兵だった。

「これはなんと」

「弟君イブール様、謀叛の企て。ナシル様と宰相アッスイー様はすでに

敵の手に……」

兵士は言い終わると同事に事切れた。

続いてウオーというすさまじい雄たけびとともに、軍大臣配下の兵士が乱入してきた。

「おのれ、先を越されたか」

悲痛な声をあげた侍従長は、鞆をはらいざま先頭のひとりや二人を切つて捨てた。しかし多勢に攻め込まれ、「無念」とだけ言い残して、深々と胸を刺し貫かれた。

「くそつたれ侍従長めが。きさまの策略など、とうに見抜いておつたわ」
遅れてはいつてきた軍大臣が、床に倒れた侍従長の頭を蹴り上げながらにくしくしげに言い放った。

続いて胴着からはみだした太鼓腹を揺すりながら入城してきたのは、

謀叛の張本人イブールである。

「老いぼれは見つかつたか……」

「いや、いまだ」

「よく探せ。あのからだではいずれ遠くには行かれまい」

その時、イブールは宮殿の奥に据えられた王座をふと見上げた。

「これは、いったいだれが……?」

「これこそ噂に聞く名工アブールの王座ではございませんか」

大臣が答えると、

「アブールの王座だと? したがあれはついに完成せず、頭に血を昇らせ
た老いぼれが、やつこの両腕を切り落としたのではなかつたか。では、も
はや王座は成つていたのか。それさえわからなかつたとは、やはりどこ
までも惚けておつたわ」

「そのような不吉な王座、さっそく打ち壊し、新しい王座を造らせましよう」

大臣の追従を背に階段を上ったイブールは、王座の背の部分に施された見事なレリーフと向かい合った。そこに彫り込まれていたのは、かつて一代の梟雄と呼ばれた霸王の顔だったが、口を開いたその表情は歓喜とも苦悶とも、いずれともつきかねた。

イブールはにやりと笑うと、上首尾の余韻さめやらぬ声でいった。

「まあ、よいではないか。あの高慢ちきな老いぼれを尻に敷くのも一興だぞ」

遂に王国をわがものとした弟君は呵々大笑しながら、その重い腰を深々と王座に沈めた。

こうして老霸王はアブーが約束したとおり永遠の生命をえることがで

きた。憎んでもあまりある謀反人の尻の下で。

©1985 新戸雅章